

第9回 記者懇談会実施要項

- 1 開催日時 平成9年10月8日(水)
午後3時から
- 2 場 所 100周年記念会館第2会議室
- 3 懇談内容
 - (1) 若手研究者の研究テーマとその成果の中間発表(15時~15時30分)
 - 経済学部教授 長久 領吉
研究テーマ「エコノミックデザイン
ー市場をキーワードに社会を考える」
 - 工学部助教授 関 眞佐子
研究テーマ「微小血管内の血液流れの
流体力学的研究」
 - (2) 学内情報(15時30分~16時)
 - (3) 情報交換(16時~16時30分)
- 4 関西大学の出席者
 - 石川 啓 学長
 - 橋本 昭一 広報委員長
 - 浦上 忠 教学部長代理
 - 長久 領吉 経済学部教授
 - 関 眞佐子 工学部助教授
 - 岩村 護 企画室長
 - 荒木 紀忠 広報課長
- 5 配布資料
 - ① 記者懇談会実施要項
 - ② 長久 領吉教授の発表資料
 - ③ 関 眞佐子助教授の発表資料
 - ④ エクステンション・リードセンターの新講座の案内
 - ⑤ 関西大学図書館秋季特別展「王朝物語の展開」の案内
 - ⑥ 第2回関西大学図書館セミナー「インターネットと法情報」の案内
 - ⑦ 関西大学オープンセミナーの案内(福岡・仙台・熊本・北九州)
 - ⑧ 『関西大学通信』第257号

以上

エコノミックデザイン

ー市場をキーワードに社会を考える

経済学部教授 長久 領亮

研究概要

私たちの社会では人々は互いに協力することを通して、そうでない場合よりも多くの成果をあげうる反面、獲得した成果の分配に関しては構成員間で鋭い対立が生ずる。このような強調と対立の二面性を持つ社会において、市場、つまり価格をシグナルにした取引ルール、は競業編成と成果分配の安定的な原理として機能してきた。市場をいつ、どこで、誰が発明したか今のところ謎とされている。しかしその起源は人類の歴史と共に古く、たとえばわが国においても、一部の地域からしか採掘されない翡翠が縄文前期の地層から全国いたるところで出土することから、交易がかなり古くから行われていたと推測されている。

市場システムを構成する二つの柱は私有財産の尊重と自由な経済取引である。この二つを共に否定した経済システムの一つにいわゆる社会主義計画経済があるが、その末路がいかなるものであったかはここで書くまでもないであろう。

市場システムはなぜ他の代替的資源配分システムを押さえて人類社会に定着してきたのか？この疑問に答える一つの方法は経済システムが満たすべき性能基準を考え、各システム間の優劣を判定することである。この分析視角にとって社会的選択理論、メカニズムデザイン、そしてゲーム理論は大きな役割を果たすことになる。

プロフィール

長久領 孝 (Ryo-ichi Nagahisa)



1958年4月6日 福岡県 生まれ
関西大学経済学部教授

経歴：山口大学経済学部卒業（昭和57年）。同年4月 神戸大学大学院経済学研究科に進み、岸本哲也教授の指導のもとで、主に社会的選択理論の研究を行う。59年3月に神戸大学経済学修士号を取得。昭和61年4月に富山大学経済学部助手着任。平成6年3月 同大学退職して、同年4月、関西大学経済学部助教授着任、現在に至る。平成2年10月より2年間米国にて在外研究。

専門分野 社会的選択理論、厚生経済学、ゲーム理論
学位 神戸大学経済学修士
学会 理論計量経済学会

大学ではミクロ経済学を担当。ほぼ毎日大学にいき、朝から晩まで研究室にいるが、ずっと研究しているわけではない。少し研究しては、長時間コンピューターゲームで遊び、それに飽いたら漫画を読み、横になって寝る。これを一日数回繰り返すのが、日課である。会社勤めの人が聞いたら、なんともうらやましい生活ではある。

ゲームは主に、じっくり考えるシュミレーション系（戦略シュミレーション、キャラクター養成シュミレーション）が好き。今までで一番面白かったのは、GAINAXのプリンセスメーカー。

今は数理経済学者として、身を立てているが、子供の頃は算数は苦手だった。得意だったのは、図画・工作。ブロックで家や飛行機を造って遊ぶのが、とても好きだった。「創造する喜び」をよく知っていた子供だったと今にして思う。

大人になった今でも、基本的には子供の頃と変わらない。数学を分析用具にして社会現象を捉え、モデル化する。ブロックが数学になり、家や飛行機が社会モデルになっただけだ。

学問のプロとして、今モットーにしているのは、「夢を失わないこと、子供の心を失わないこと」である。「科学が夢をはぐくみ、夢を実現しようとして科学は進歩する。」（柳田理科雄「空想科学読本」（宝島社））は全くその通りである。だから私にとって、プリンセスメーカーの夢の世界は必要なのだ。

微小血管内の血液流れの流体力学的研究

工学部助教授 関 眞佐子

心臓から出た血管は枝分かれを繰り返しながら徐々に細くなり、体中のあらゆる臓器まで達し、そこで微小な血管のネットワークを形成して、組織細胞に酸素や栄養素等を供給している。臓器内の微小血管は、このような生理的重要性の他に、心臓が血液を拍出する際の抵抗の最も重要な部分を担っているため心臓の負荷と直結しており、その異常は高血圧症等種々の循環器病の病態や成因とも関係している。発表者は、このような微小血管内の血液流れについて、流体力学的な立場から研究を行っている。

微小血管内の血液流れについては、その医学的重要性から活発に研究されているが、血管サイズの小ささや生体特有の複雑さのため、動物実験による計測は難しく、また実験結果の解釈が困難である場合が多い。発表者の研究は、流体力学的な数値シミュレーションを用いて、微小血管内の血液流れについて理論的に解析しようとするもので、個々の赤血球の運動・変形、種々の病態における白血球の複雑な挙動や血管抵抗の定量的評価等、動物実験では計測が困難な現象を解析し、その機序の解明を目指している。



島根県の出身で、1979年京都大学理学部を卒業された後、大学院に進学され、流体物理学、特に乱流理論について学ばれた。81年より国立循環器病センター研究所で研究を続けられ、95年4月本学に着任された。京都大学理学博士。専門は、主に血液の流れを中心に扱う生理流体力学で、現在、微小な血管内における血球の変形や運動について、主として数値シミュレーションによって理論的に研究を進めておられる。

趣味は新書を片っ端から読みとばすことと、クラシック音楽を聞くこと。しかし最近、仕事と保育園に通われるお子さんの育児に追われて、その時間もあまりとれないとのことである。86年から2年間ニューヨークとサンディエゴに留学されたとき、本場でのコンサート通いとスタジアムでのプロ野球観戦を堪能され、その生活がなつかしく、子育てを終えて自分の時間をもてる日が来るのを楽しみにして居られるご様子である。